

# 非凡な人になる

至誠を尽くせば  
必ず明かりが見えてくる

一所懸命、一心不乱——創業時の私は、ただただ夢中でした。人が十時間働けば、私は十四時間、十六時間働きました。二十四時間寝ずに働くこともよくありました。当時は会社の車に乗り、しばしば遠方まで仕事に向向いていましたが、旅館に泊まる時間もお金もなく、いつも夜を徹して走り続けるか、車中で夜を明かしていました。

いまのようにエアコンのない時代です。夏は窓を閉めて寝ると蒸し風呂のように暑く、開ければ体中蚊に刺されたものです。冬は骨が凍るくらいまで冷え込み、目が覚めて体を起こすとポキンと折れるのではないかと思うくらいでした。

そうした中で、先方が何を望まれているのかを必死で探り、それに懸命にお応えして信頼を積み重ねてまいりました。自分の体力、心を尽くせるだけ尽くして、なんとか毎日乗り越えていた私には、もっと上手くやってやろうとか、もっと楽な方法は

ないか、などと考える余地はまったくありませんでした。

よく「あの手、この手」といいますが、人間には二本しか手はありません。与えられた条件を生かしてやっていくしかないのです。そうして至誠を尽くしていけば、必ず見えなかったものが見えてきます。どっちが東か西かも分からないような真つ暗闇の中でも、いつか薄明かりが見えてくるものなのです。これは私の体験から確信を持って言えます。

もし何も見えてこないとしたら、まだまだ

だ誠意の尽くし方が足りないと考えるべきです。自分はこんなやってるのに、なだと思ってるうちはまだ駄目なのです。

この厳しい競争の時代に、そんな精神主義は通らないと考える人も多いことでしょう。しかし、昔から競争のない時代はありません。実際に私自身も、大変な競争の中を歩んでまいりました。他社が目にも留めないわずかな隙間に目を向け、それが少しでも広がるように努力を重ね、道をひらいてきたのです。

惰性を  
断ち切るには

人生も仕事も、一所懸命やっているつもりでも、いつの間にか惰性に陥ってしま

がちです。

人生においては一日たりとも同じ日はありません。にもかかわらず、自分の生き方や仕事ぶりが三年前と少しも代わり映えないようであれば、既に惰性の世界に入っている証拠です。

皆さんには、ぜひともこの惰性を断ち切り、非凡な人になっていただきたいと思えます。

惰性を断ち切る一番の方法は、変化を求め続けることです。

それが最もよく分かるのが掃除です。掃除をすると、それまで汚れていたところがきれいになり、すぐに変化が確認できます。変化が確認できると、次に為すべきことが見えてくるのです。

変化を求め、次々と新しい目標を見出し

て、その目標に向かって誠実に努力を続けていくと、ある時、他の人が及びもつかない領域に自分が入っていることに気づくようになります。そこはもう既に非凡な世界なのです。

このように、誰もが非凡な世界に入ることとはできるのです。

自分の人生が素晴らしいものかどうかは、終えてみなければ分かりません。しかし、一日一日素晴らしい生き方を積み重ねていくことはできます。誰もが簡単に歩めるような安易な道ではなく、人がなかなか歩まないような道を選んでいただきたいと思えます。たとえ辛く、厳しくとも、あえてそういう非凡な道を歩んでいく中で、自分が生きる意味を見出していただきたいと願っています。

# 人の生き方には 一通りある

## ◎請求書の人生と 領収書の人生

“もっと、もっと、もっと”

際限なく求めて欲しがって生きるの  
は、「請求書の人生」であると、知人の  
有吉様志様から教えていただきました。  
有吉様は、幼い頃お祖母さんから、

寺社にお参りした時は「ありがとうこ  
ざいます」と請求書ではなしに領収書  
のお参りをしなさい、と教えられたそ  
うです。

向上心や探求心は人の成長に欠かせ  
ない大切な条件ではありますが、度の  
過ぎた欲求は人を卑しくし、ひいては  
国家の尊厳を傷つけることにも繋がり  
ます。

有吉様のお話を通じて、求めるばか  
りではなく、いま与えられているもの  
ことに感謝の心を持つ「領収書の人生」  
を歩めと教えていただきました。

日本には領収書の生き方をしている  
方が大勢おられますが、そういう方は  
世間から注目されることはありません。  
請求書の生き方をする人が派手で目立  
つのに比べて、領収書の生き方をする  
人は地味で人目につかないところが共  
通しているからです。

誰からも注目されず、光の当たらな  
いところで、いつ報われるか分からな  
いことにも心を込めて取り組んでおら  
れるそのお姿からは、卑しさは微塵も  
感じられません。

他人に頼ったり、求めたりすること

なく、人の役に立つことだけを念頭に  
おいて、一途に歩み続けるお姿は、人  
を惹き付ける豊かな魅力を備えていま  
す。

このような方々は、お互いに住む世  
界は異なっているけれども、一度会っただけ  
で朴訥なお人柄に惹かれ、年来の知己  
のようになります。語り合ううちに、  
この方の成功を祈り、ささやかであつ  
てもお手伝いをしたいという思いが湧  
いてきます。そして、この領収書の生  
き方をされている方々同士のご縁を結  
ぶことの大切さを実感いたします。

## ◎求めるべき 人の交わり

古人は、人の交わりがともしれば「利  
交」に陥りやすいと論じています。「賄  
交・勢交・量交・談交・窮交」の五交  
を利交といい、虚しい交わりの中で貴  
重な人生を終える人が多くいます。  
利交の世界に生きる人に共通してい

るのが、「請求書の生き方」でありまし  
よう。国家の外交においても、お互い  
が「国益」のみを主張すれば、外交で  
はなくて利交でしかありません。

領収書の生き方をしている人の交わ  
りは、「素交」といい、友人としての三  
原則を不知不識のうちに守っています。  
日本の政治・行政・経済に三原則が保  
てた時、真に美しい国になれると確信  
します。

## ●三原則（『過去現在因果経』より）

- 一、過ちあるを見れば即ち相諫す
- 二、好事あるを見れば深く随喜を生ず
- 三、苦厄に在らば相棄てず

- （一）友の過ちに対しては、それを見  
過ごさず、真心を込めて忠告する
- 二、友のよきことに接した時、心の  
底から喜ぶ
- 三、友が困難に陥り、災難に遭った  
時、決して見捨てない